

高校野球の魅力

酒井 智美

T..... SAKAI

中京大学現代社会学部現代社会学科
学籍番号

要旨…この文書ファイルは、高校野球をやる側ではなく、見る側の視点から、高校野球のおもしろさや魅力について書かれている。

キーワード 高校野球, 甲子園, 高校(甲子園)球児, ヒーロー, アイドル化

1. はじめに：研究主題（私の関心）

私の人生において、野球は必要不可欠なものとなっている。その中でも高校野球は、私が野球を好きになるきっかけくれたもので、特別なものである。野球好き人生の原点だ。ではなぜ、プロ野球ではなく高校野球だったのか、高校野球の魅力とは何か、私の心を掴んだものは何だったのか、そんな自分に対する問いかけからこの研究は生まれたのだ。

2. 高校野球（甲子園）について

日本における高校野球とは、日本の高等学校の生徒、中等教育学校の後期課程の生徒、高等専門学校第1学年から第3学年の学生が行う野球のこと。特に阪神甲子園球場で行われる二つの全国的な男子硬式野球大会は「甲子園大会」と呼ばれている。なお、旧学制による高等学校野球とは言葉が似ているが、これは現在の大学野球の前身で全く異なる。現在の高校野球の前身は、旧学制による中等学校野球が該当する。戦後の学制改革によって再編・継続され、名称も変更されているためである。

(1) 全国大会

- 選抜高等学校野球大会（春の甲子園、センバツ） 出場校数 32（記念大会では 34 あるいは 36）

毎年 3 月下旬から 4 月上旬にかけて開催される。秋季地区大会の成績などを参考に選抜された一般選考 28 校、特別選考の 21 世紀枠 2 校、希望枠 1 校、明治神宮枠 1 校の計 32 校で行われるトーナメント大会（明治神宮枠は獲得地区の一般枠を増枠する形となる。又 2010 年の第 81 回大会より希望枠を廃止し 21 世紀枠が 3 校になる）地区大会の成績や選考次第では同一府県から 2 校以上の出場がかなう場合もある。（ただし一般枠のみで 3 校選出はしないこととなっており、3 校出場は 21 世紀枠を含めた場合の時可能である）優勝校には大紫紺旗が贈られる。尚、2008 年の第 80 回記念大会は一般選考 30 校、21 世紀枠 3 校、希望枠 1 校、明治神宮枠 2 校の計 36 校で争われた。

- 全国高等学校野球選手権大会（夏の甲子園、選手権） 出場校数 49（記念大会では 55）

毎年 8 月に開催される。各府県 1 校ずつ、北海道は南北海道・北北海道の 2 校、東京都は東東京・西東京の 2 校の合計 49 校によるトーナメント大会。6 月中旬から 7 月下旬（雨天順延で 8 月にずれ込む場合もある）にかけて行われる地方大会を勝ちあがった学校が出場できる。

国民的行事と呼ばれ、ときに社会現象となるほどの盛り上がりを見せる学生スポーツ最大の大会である。優勝校には大深紅旗が贈られる。尚 2008 年の第 90 回記念大会は、1998 年の第 80 回記念大会同様に従来の北海道と東京に加え、埼玉、千葉、神奈川、愛知、大阪、兵庫の各府県からも 2 校ずつ代表校が決定され、計 55 校で争われた。

• 国民体育大会（国体）・硬式の部 出場校数 12

毎年 10 月に開催される。選手権で成績上位の高校から選考された 11 校と開催地校 1 校によるトーナメント大会で、シーズン最後の全国大会。日程の余裕がないため、雨天中止が続いた場合には、ダブルヘッダーの実施や同時優勝になることもある（1979 年は日程が消化できず、ベスト 4 に残った 4 校が優勝校扱い。また、2008 年はわずか 2 日しか試合が実施されなかったため、優勝校無しとなった）。秋季地区大会の最中に行われることになるため、3 年生のみで参加する高校も多い。公開競技であるため成績は天皇杯に加味されない。

近年は国体の目玉種目となっており、2006 年ののじぎく兵庫国体では会場の高砂市野球場に徹夜組が並び、2007 年の秋田わか杉国体では会場のこまちスタジアムに高校野球としては球場史上最多の 2 万 4000 人が詰めかけた。

• 明治神宮野球大会・高校の部（神宮大会） 出場校数 10

毎年 11 月に開催される。秋季地区大会で優勝した 10 チームによるトーナメント大会で新チーム最初の全国大会。出場校は各地区大会での優勝により翌年のセンバツ出場がほぼ確実にしたチームばかりなので、センバツの前哨戦としての意味合いを持つ。同大会での優勝校所属地区は翌年のセンバツの出場枠を 1 つ多く獲得できる特典がある（明治神宮杯→但し 2003 年の 34 回大会以後）。なお、2007 年の第 37 回大会では決勝進出の両地区に翌 2008 年のセンバツ出場枠が与えられた（記念大会のため）。

主催は、全国大会は日本高等学校野球連盟（高野連）と新聞社（春の選抜高等学校野球大会は毎日新聞社、夏の全国高等学校野球選手権大会・全国高等学校軟式野球選手権大会は朝日新聞社）が行っている。2010 年より選抜の後援に朝日新聞社が、選手権（全国大会のみ）の後援に毎日新聞社が、完成以来両大会の会場を提供してきた阪神甲子園球場が「特別協力」として加わる。この他、地方大会は各都道府県高等学校野球連盟など（夏の全国選手権出場校を決めるための地方大会は朝日新聞社も）が主催する。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%A1%E9%87%8E%E7%90%83> (2011/02/24)

(2) 甲子園の土

- なぜ、負けたチームは「甲子園の土」を持ち帰るのか。

現在では甲子園での最後となった試合後に土を拾って持ち帰ることが伝統となっているが、いつごろに定着したかははっきりしていない。最初の持ち帰りとしてよく例に挙げられるのは以下の 3 つである。

- ◇ 1937 年の第 23 回大会で、熊本工（熊本）は決勝戦で敗れて準優勝に終わった。決勝戦終了後に、熊本工の投手だった川上哲治は甲子園の土をユニフォームのポケットに入れ、自校の練習場にまいた。
- ◇ 1946 年の第 28 回大会では、準決勝にて敗れた東京高等師範附属中（現・筑波大学附属中学校・高等学校）の佐々木迪夫監督が、最上級生以外の選手達に（この中に竹田晃がいた）来年また返しに来るという意味で、各ポジションの土を手ぬぐいに入れて持ち帰らせた。ただしこれは米軍接收中の甲子園ではなく阪急西宮球場でのことである。これは新聞で記録されている最古の持ち帰りである。
- ◇ 1949 年の第 31 回大会で、小倉北（福岡）が準々決勝で負けた後、小倉の投手だった福島一雄がマウンドの土を無意識にポケットに入れた。大会後に大会役員から手紙でそれを指摘され、その土を植木鉢に混ぜ込んだ、という話が残っている。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%A1%E9%87%8E%E7%90%83> (2011/02/26)

日本人は、試合場を、心身を鍛錬する「神聖な場所」と考える節がある。そのため多くの球児は、球場を出入りするときに、感謝の意味をこめて球場に向かって「礼」をする。このように考えると、球児たちにとって「甲子園の土」は、やはり特別なもののだろう。

3. ファンがみる高校野球

(1) 高校野球ファンになったきっかけ

全国（地方）大会を見てから…18%

いつの間にかはまった…17%

高校野球の応援（をすること）が好き…16%

現役（元）高校球児…13%

現役（元）野球部マネージャー…8%

友人、知人の影響…7%

母校が出場…6%

プロがおもしろくない…2%

その他…10%

(mixi コミュニティ『プロ野球よりも高校野球のが好き』より)

(2) 高校野球の魅力

いろいろな掲示板から勝手に集計してみた。

- 高校球児の全力プレー
- 何が起るかわからない・ドラマがある
- 感動を与えてくれる
- 一球一打の緊張感
- ブラバンなどの応援団
- 仲間との絆

など、やはりプロでは見ることのない高校野球ならではのがむしゃらな野球に魅せられている人が多い。

(3) 甲子園のヒーロー

- 松坂 大輔（横浜）

平成の怪物・松坂大輔は、嶋清一（海草中）以来、史上 2 人目の選手権決勝ノーヒットノーラン、史上 5 度目の春夏連覇。150km の速球とスライダースで近年の高校野球では図抜けた存在感を示した。

- ダルビッシュ有（東北）

長身から投げ下ろす快速球と 9 種類の多彩な変化球で、平成 15 年夏の選手権準優勝。翌 16 年春の選抜 1 回戦では、熊本工を相手に大会史上 12 人目のノーヒットノーランを達成。

- 斎藤 佑樹（早稲田実）

平成 18 年夏の選手権優勝投手。37 年ぶりの決勝戦引分再試合を含む甲子園史上最多の 7 試合・69 回を実質一人で投げ切り、早稲田実は夏の全国初制覇を達成。候補・駒大苫小牧の 3 連覇を阻止。

- 田中 将大（駒大苫小牧）

57 年ぶりの夏の選手権 2 連覇を達成。平成 17 年夏の選手権優勝投手。前年の北海道勢初の全国制覇に続く 2 連覇の立役者。3 連覇を狙った 18 年夏は決勝で引分再試合の激闘の末、斎藤を擁する早実に 1 点及ばず。甲子園では無敗。

- 今村 猛（清峰）

平成 21 年春の選抜優勝投手。決勝で菊池雄（花巻東）との投手戦を 1-0 で制し、紫紺の大旗が初めて長崎に渡った。5 試合 44 イニングで 3 完封、失点 1、防御率 0.20 という抜群の安定感だった。

- 菊池 雄星（花巻東）

平成 21 年春の選抜準優勝投手。最速 152km の速球が唸りを上げ、2 試合連続完封を含む 5 試合 40 イニング 3 失点の快投は華のある投球だった。決勝で清峰に 0-1 惜敗し白河越えは成らず。同年夏の選手権でも 4 強入り、東北との 3 回戦で左腕投手として甲子園最速の 154km をマーク。

- 島袋 洋奨（興南）

沖繩勢初の夏の全国制覇で史上 6 校目の春夏連覇を達成した興南のエース左腕。松坂（横浜）以来の甲子園 11 連勝。トルネード投法で積み重ねた年間 102 奪三振は左腕投手の歴代最多記録。

(激闘の記憶と栄光の記録 <http://www.fanxfan.jp/bb/> (2011/02/27))

4. 甲子園と郷土アイデンティティ

(1) 郷土アイデンティティとは

郷土への帰属意識。甲子園出場校や甲子園球児は、都道府県の代表として郷土そのものを体現し、現代日本人の心情や心性（メンタリティ）を表現している。甲子園は、おらが代表なのである。

(2) 甲子園と愛校心

「一般の生徒は野球以外の運動部を純粋なクラブ活動として、また運動部員は自分たちと同じ生徒として、つまり仲間としてみているのだが、野球や野球部員に対しては少し違った見方をしている。娯楽要素を提供してくれる存在としてとらえている。一般の生徒の間で甲子園出場による知名度アップへの期待が高く、女子生徒の間で選手をアイドル視する、つまり、スペクテーター・スポーツとしてとらえる傾向がより多く認められた。

では、なぜ高校野球なのか。それは、高校野球が制度化されたスペクテーター・スポーツとして確固とした位置づけがなされていて、このことが高校野球の統合シンボルとしての役割をいっそう高めている。

(3) 甲子園と郷土アイデンティティ

甲子園は、現在住んでいる土地に対する愛着だけではなく、かつて住んでいた郷土に対する郷愁をも兼ね備えた郷土アイデンティティが発現される場である。また、狭義には、出身母校に対する愛校心として郷土アイデンティティをとらえることも可能である。

5. むすび：研究成果（私の主張）

男性ファンは、単純に野球を見るということを楽しんでいるように思えるが、女性ファンは、野球を見ることもだが、まずは高校球児を見ることを楽しんでいる気がする（もちろん全ての女性ファンがそうというわけではないが）。高校球児のアイドル化だ。テレビ中継を見ながら、イケメンを見つけて、チェックして、そんなことを繰り返しているうちに野球のおもしろさを知り、高校球児だけでなく、高校野球そのものの魅力に気づいていくのだろう。実際に、『輝け甲子園の星』などの雑誌で、甲子園で活躍したイケメンが特集されていたり、高校野球に関する掲示板では「〇〇くんかっこいい」とか「××くんもかっこいい」とかで盛り上がっているトピをよく見かける。

実際に私が高校野球を好きになったきっかけも、中3の春休みにたまたま見たセンバツのある試合だった。当時、愛工大名電の2年生だった堂上直倫選手に心を奪われた。気づいた頃には、堂上選手だけでなく、愛工大名電というチームが、高校野球が好きになっていた。それからというもの、携帯の待ち受けはお気に入りの選手、暇さえあれば、ビデオに録った試合を見たり、雑誌を買って読んだり、ときには球場まで足を運ぶ……まさに高校球児のアイドル化だ。

ではなぜ、プロ野球ではなく、高校野球なのだろうか。それはきっとプロ野球に比べて、高校野球の方が身近に感じるからだろう。それぞれの高校がそれぞれの都道府県の代表として戦う。だから応援したくなるし、つい見てしまう。もしかしたら、母校だとか、選手が自分と同じ世代、自分の子どもと同じくらい、通勤、通学時にみかけるからなんて理由で身近に感じる人もいるかもしれない。また、プロ野球のようにプレーを魅せるということよりも、負けたら終わりという中で、勝つことや仲間を信じて頑張っている姿などの一生懸命さに心打たれるのだろう。そして、高校野球には、プロでは考えられないような、何が起るかわからない、想像もできないようなドラマが待っている。

私は、高校野球に出会ったことで、野球は泥臭く、汗臭いものではなく、感動を与えてくれるものであるということ、仲間の大切さや、時には、家族の大切さなどを教えてくれるものだと知った。高校野球は、家族の支えなしでは成り立たないスポーツだ。ここにも、高校野球ならではの魅力を感じた。

そして、高校時代に注目された選手はプロの世界でも結果を残している人が多い。プロ野球ファンにとって高校野球というのは野球をみて楽しむということだけでなく、将来のプロ野球選手を見つけるなどといった楽しみ方ができるのではないだろうか。高校野球が盛り上がることで、低迷しているプロ野球人気も上昇することだろう。

参考文献

- 1) 江刺正吾、小倉博（1994）：高校野球の社会学
- 2) 松尾順一（2003）：高校野球の観方を変えよう